

前回の終わりに、「今回は窒素かイオン」と予告したのですが、心変わりしました。昨夜改めて考えたところ、「腰を据えて化学を勉強した方がいいのではないか」と思い直したのです。ということで、今回は化学を一から勉強し直す、という考えの下、化学の歴史について学習しようと思います。

ところで「化学」を手元にある広辞苑で引いてみると、「化学：物質の性質、並びに物質間の反応を研究する自然科学の一部門」とあります。これを踏まえると、化学は物質に関すること、「万物は何でできているのか？」という古代哲学が起源かもしれません。私は以前写真のような雑誌を読む機会があったので少し紹介すると、ソクラテス（紀元前400年頃のギリシャの古代哲学者）が大きな役割を果たしたようです。彼以前は「万物の根源は水だー!!」「いやいや火だー!!」など、世界のことを何かと「説明」する哲学者が常だったようですが、ソクラテスは「ん～、そうかどうかは分からないよね、だって俺何も知らないもん」という考えで、様々な人に会って対話（質問）を繰り返したようです。この哲学手法を「問答法」といい、このソクラテスの姿勢は「無知の知（知らないことを知っている）」という言葉に集約されそうです。

話はだいぶ逸れましたが、化学の始まりは紀元前600年頃まで遡るようです。とは言えこの頃の考えは間違っていたわけですから、どこで軌道修正されていくのでしょうか。その話は次回にしたいと思います。

※ 「万物の起源は水だ～」という考えは、今から思えば笑っちゃうほどの間違いなのですが、化学にとって無駄なことだったのでしょうか？ウィキペディアの「化学」の記事にもありますが化学は積み上げ型の学問です。それは一つ一つの実験データや小さな考え方の積み重ねが今に至るわけで、前回書いた「1年生からの積み重ねが大事」ということにも通じると思います。ただその前進も、幾多の失敗、多くの悩みがあってこそ、だと思ふのです。ですからそれぞれの考えも無駄ではなく、そしてそのことを知ることが、歴史を勉強する意義かもしれません。

※ ソクラテスは、多くの人に会って「問答」をした、と紹介しました。ただ現状では「人に会う」ということが難しそうです。それではどうしたらいいのでしょうか。それは、「人（相手）」ではなく、「自分」に会うしかないのではないのでしょうか。「自」らに「問」い、「自」らに「答」える、これぞ正に「自問自答」です。今の時期を「自分とは一体何なのか」を考える貴重な機会と捉えてみてください。

